

我々が担う課題の重さ故、これまで半ば自然成長的自己形成な全共闘運動を自己検証し、新たに地平からの闘争主体の構築に向け、今回の合宿が次のような内実を獲得するものとしてあった。

「あやまつて聞えれば自滅し、たしかわなければ後衛に転落し、じっとしていれば独立体制内の擬制的な安寧によつて、腐敗し、変質してしまう…」(吉本隆明)。だとすると5568-69全共闘運動は、自己欺瞞の終焉を自己満足の改良を拒否し、権力との接戦過程でしか勝利的展望を語り得ないというギリギリの地平に立ったが故に、コップの中の地平に終ることはなかった。我々、「68-69全共闘運動の頂点を走り抜けた東大全共闘の位置と道を確定し、伯別明大前争の現局面を意識化し、大學一市民社会一国家統体批判の視点を通して、過去期世界論との関連性から向うといったところにあつたと考える。ここでは、過去期世界論の視点は別にゆずるとして、①市民社会論②東大闘争の到達した地平、③明大前争の現局面を合宿の総括として明らかにしたい。

①略 ②一東大闘争の到達した地平は何か?—  
個別ゲゼルシャフト的共同体社会の特殊階層に拘われた闘い、その闘いがパリストニ実力闘争による諸法制度からの自立であるが故に、分業構造の一棟構を麻痺させる。闘いの物質的諸関係か、相互に依存し合う分業社会、アルジョワジーの物質的生産手段の所有という資本家社会人の不断の自己変革と相まって市民社会一政治的共同体として統治されるが故に、その闘いは伯別階層、伯別分業の阻止では自己完結しえず、諸階級、諸階層を巻きこんで全人の課題へと発展する。東大闘争はそのようなるものとしてあった。'68-'69は入試阻止の主体的実現を実現し、生産構造の麻痺回復恢復としての共同利害を守るために権力の市民社会への暴力的介入としてとらえかえすなら、我々に過去を現実から解放し、未来人の変革を告知するものとして次のものを指し示す。

④産業構造の変化に大学が対応しきれず、権力の指導=政府・文部省の提出する諸政策による再編が自己矛盾から出発しつつ、アルジョワジー社会に於ける大学の存在批判、その必然的深化としての、研究、自己の在り方を向うといった形で発展してきた。入試問題を媒介とする権力との攻防で激化する。  
受験生とそれと共に種々の利害をもって家族共同体を形成する闘争當時者の自らのエゴに立脚した小アルジョワジーの外化=市民社会秩序の回復=入試実施を要求する。アルジョワジーは東大闘争が学内諸関係の諸矛盾の市民社会への外延化=社会分業秩序の一角落をくすぐるが故に、自らの幻想共同性の維持のために、法の名によって乗り出す。ここに諸人の伯別利害が政治的共同体のイデオロギーに統合=支配秩序に包摂される。これをより原理的に言うならば次のようになる。

市民社会のアトム化された諸仙人がいたく伯別利害に対して、大学の自治、市民

## 明大全共闘 生田地区共闘会議

社会の秩序という共同利害としてあると鬼われるが、ある階級の利害として幻想の共同性として外化したものであることを。

③ リのアルジョワジー再編に対する闘いは、社会の権取関係が幻想の共同性=法の名による普遍性を隠蔽されているが故に政治革命が唯一義的にあげられる。かつて、日常不斷の市民主義的意識の腐食を内包したものであることを、これは「ドイツ・イデオロギー」と「オイエルバッハ」の理解から言えはこうだ。<sup>40</sup> 「最も支配的な意識か、最も支配的な物質的諸関係の觀念的表現であり「物質的生産手段を所有する人間が精神的生産手段を所有する」が故に「支配をめざす各階級はたゞその支配がプロレタリアートの場合そうであるように、旧社会形態全体と支配一般との廃止をもたらす場合でもその階級の利害をやけにまた普遍的なものとしてしますためにには、すす何よりもさきに政治権力を奪取せねばならない」。

④東大闘争の位置は、「東大闘争者」という規定の下に、そなであるが故に体制内化しつつある「自己規定」を90年の抑圧と身心のアヒテス体の中に対象化し、それからの種々の違恨からの解放を「自己否定」として提起した。その論理的帰結として「=相互性は言うまでもない」権力の支配構造(=北大協、大学の學問、研究利益共同体イデオロギー批判)、産学協同批判を媒介としたく教授会解体」「大学解体」の永続的普遍的戦略課題の提起としてある。ここで教授会批判について簡単に述べておくと、諸科学するという私的所有(専門研究の自由)-擬似共同体所有(魔法)」がアルジョワジーの特殊利害にすぎないので、いまだ普遍的利害=社会の普遍的發展というような幻想が大義名分が存在するかのように思つてゐるが教授-教授会である。彼等がそう思つてゐるに帝國主義的分業体制へ再編されているのである。引用が長いということはあもしろくないが次の「ドイツ・イデオロギー」で結語に變えるとしよう。「何故イデオロギーたちは、すべてを並立させるのか。分業による職業の自立化。各人は自分がたゞこわる仕事を眞實なものと見なす。彼らは、彼らの仕事と現実とのつながりについて幻想をいたぐが、それはじつは当の仕事の性質そのものによってひきおこされるものであるだけに、それをだけいっそ必然的な幻想である。諸関係が法律学、政治学等々のなかで一意論のなかで一説概念となるのである。即ち、それも諸概念が、その諸関係を越えていしないときには、これら諸関係についての概念も、かねらの頭の中で固定した概念となっている。たとえば裁判官は法典を適用する。それが故に、彼は立法を真に能動的な作動者とみなす。自己の商品に付する尊敬—。」

-1-

4) 今日の社会秩序と対決し、戦後日本の政治社会構造の一角を突きくずす闘いは、社会の成熟からたらす価値感の崩壊といつて自己の存在の危機と相まって、大学の再編という70年をメルクマールとする権力の戦略に合体するのか、それとも自己を毒しきった肩立基盤=秩序を解体するのかと鋭く迫った。  
後者を真に承認する部隊への尚服は「マルクス・エンゲルス全集」よりも重かった。  
民主主義、ボーツム型組織、人類平等というヒューマニズム etc.といった擬似共同性=アルジョワジー的戦後価値の崩壊による一國家との関連に於ける諸々の価値生産といつてメカニズムの開拓がくすぐれた一社会の近代化(=普遍的發展)に自己の労働力の私的所有者(=生活の近代化)たることによってその至り得るという幻想が幻想でしかない日本一市民社会の変質に基軸をおくが故に  
70年代をメルクマールとするアルジョワジー権力の物質的、イデオロギー的絶縁は、諸階級、諸階層の分解を巻きおこさざるを得ない。『意識のない大衆の先頭にたつた意識ある少數者が遂行した革命の時代はすぎた。社会組織が完全に変革されるとたまには、大衆自身がその変質に加わり、彼等自身が問題の本質は何か、なんのために彼等は…』(エンゲルズ)かかる情勢で、得るべき秩序を否定し、法制度の限自然的自立から向自然的プロレタリアヘグモニーを市民社会の深部に確立する政治組織内容は何かと鋭く向かひかけた。  
日共幹部を粉砕し、だがが眞の前江たりうるかと登場しつつも、学生を主力としているべき秩序を向うことなく、政治闘争の徹底化を遂じてしかプロレタリアートを獲得しえず、その必然性が崩壊した安保闘争の惨敗いらむる年月差であり、10-8で提起した課題が、全学連運動の存立基盤である尊國自治会を媒介として相えないが故に、その情況を止揚し、歩えうる政治組織内容は何かといふところにあると考える。